ASSETS OF OUR LIVES

≪確かな知識を身につけ・豊かな感受性を持ち・充実した人生の実現を≫

2019年08月00日　第33巻18号

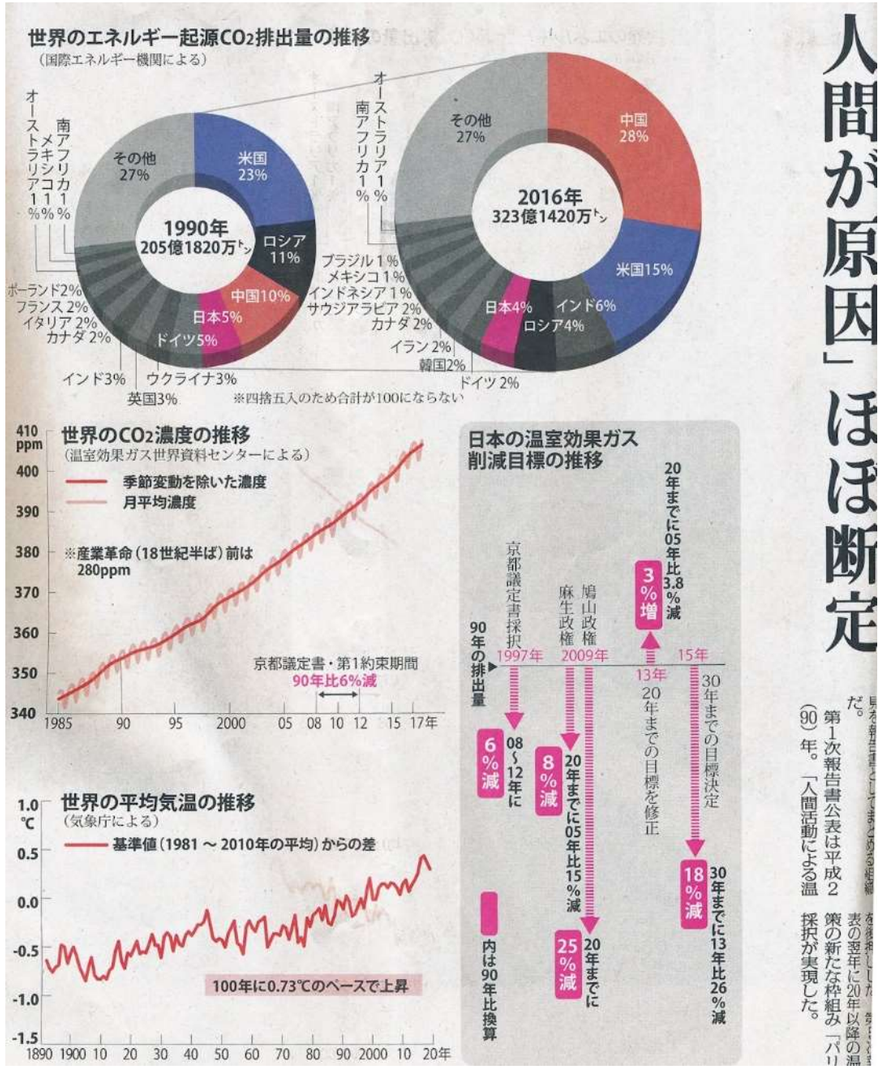
今年の春の「毎日新聞」の自然環境の特集のページをコピーして紹介します。目を通してください。平成の３０年間でこれだけ地球が壊れてきているのです。大きな新聞紙をバラバラにスキャンしてくっつけたものなので、少し醜いと思いますが勘弁してくださいね。

平成の30年間は「地球環境問題」については、とても悲惨な30年間であったと言えるかもしれません。しかしこの後はもっとひどい時代が来るかもし得ません。心して日々を送ってください。環境問題は他人事ではないのです。歌や踊りやゲームやスポーツに明け暮れないで、真剣に自然や社会を学ぶ時なのです。

拡大して詳しく見てくださいね。

現代を学ぶ　志　成　館

ちなみに、この新聞記事の一部分をまとめるだけで、夏休みの課題の「自由研究」は十分です(笑)。これに、20年前のクリントン大統領の時の副大統領であったアル・ゴアさんの「不都合な真実【新旧２冊あります】」を加えれば、時代にあった素晴らしい自由研究になるでしょう。



人間が原因」ほぼ断定

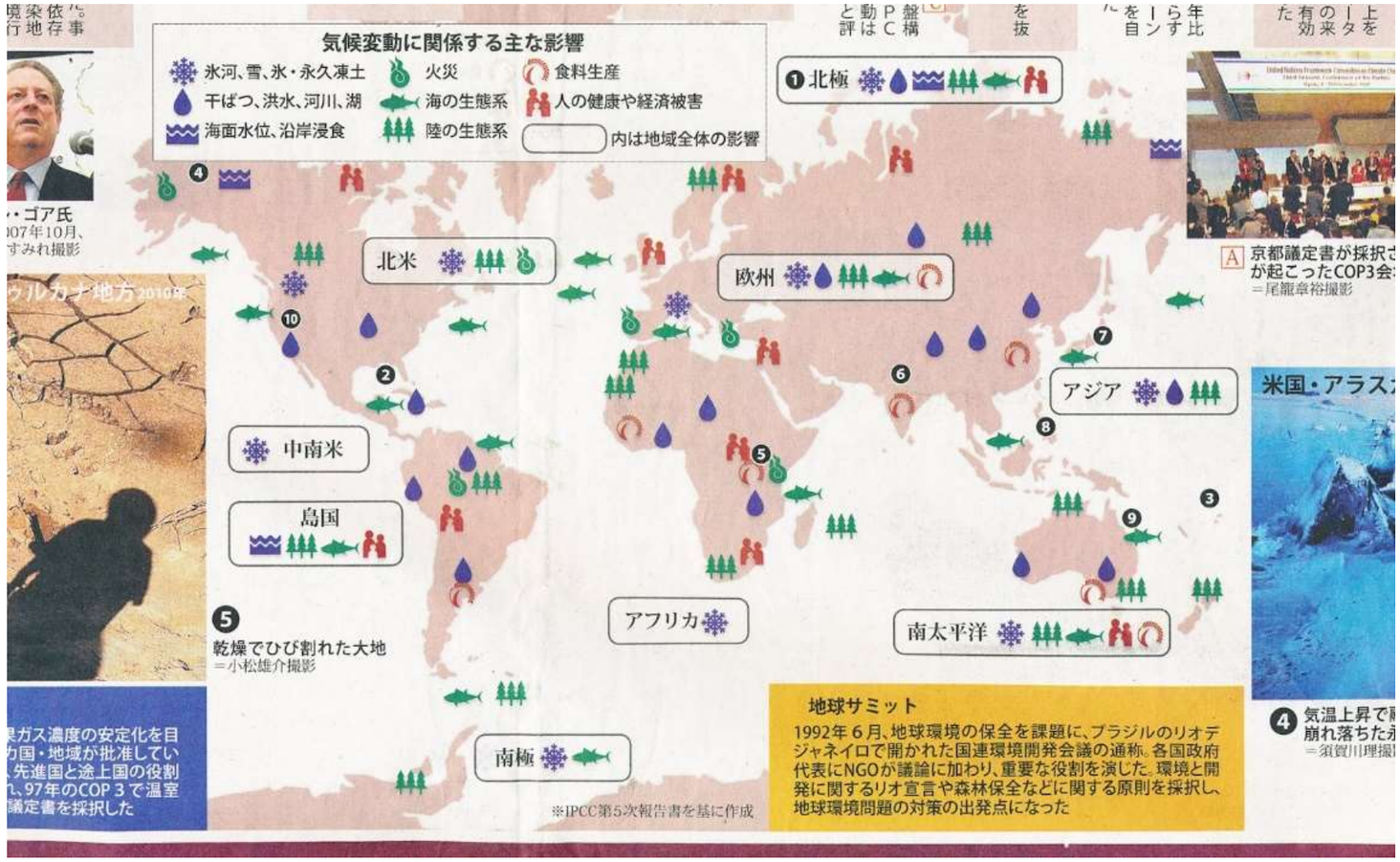
だ。

第1次報告書公表は平成2（90）年。「人間活動による温

表の翌年に20年以降の温

策の新たな枠組み「パリ

採択が実現した。



恐るべきプラスチックごみの量です

プラごみ汚染 海が「悲鳴」

軽井沢G20 全体像把握へ 枠組みに合意

海洋プラスチックごみについて、15、16日に長野県軽井沢町で開かれた主要20カ国・地域（G20）エネルギー・環境関係閣僚会合で、問題解決に向けた初めての国際的な枠組みが合意された。国内でも海洋汚染のメカニズム解明へ取り組みが始まっている。

クごみが漂うフィリピン・マニラの海で泳ぐ
境NGOグリーンピース提供

みんなのごみ

プラスチック編 [1]

●川から日常的流出

「途上国では、川はごみ捨て場。雨期になると全てが海に流れ出す。海は悲鳴を上げている」。17日に東京都内であった海洋プラごみ問題を考えるシンポジウムで、主催者としてあいさつに立った日本財団の笹川陽平会長は、そう警鐘を鳴らした。

主に石油を原料とするプラスチックは1930年代に使われ始めた。加工がしやすく、安価、ペット耐久性に優れ、容器、ペットボトルなどの容器や食品を入れる包装など幅広く使われ、生活に欠かせない存在だ。

経済協力開発機構（OECD）の報告書によると、世界のプラごみ発生量は80年の約5000万トンから、2015年には約1・6倍の8億トンにまで膨れ上がった。ごみ処理施設の整備が行き届かない途上国などでは、適切に処理されず山積みにされたり、川に捨てられたりするのが日常の光景となっている。

プラごみは自然界でほとんど分解されず、海に流出すると紫外線の影響などで細かく砕け、5ミリ以下のマイクロプラスチックになる。これは有害物質を吸着しやすい性質があり、海洋生物など生態系への影響が心配されている。近年、北極海や南極海、世界最深のマリアナ海溝でもプラごみが見つかり、世界中の海に汚染は広がっている。

米豪の研究チームの発表によると、世界全体で海洋流出するプラごみは年間478万～12万5万トン。ただ、この数字は推計にすぎない。陸から海に流出する経路や海洋汚染のメカニズムなどは、未解明な点が多く残る。

●国際ルール化目標

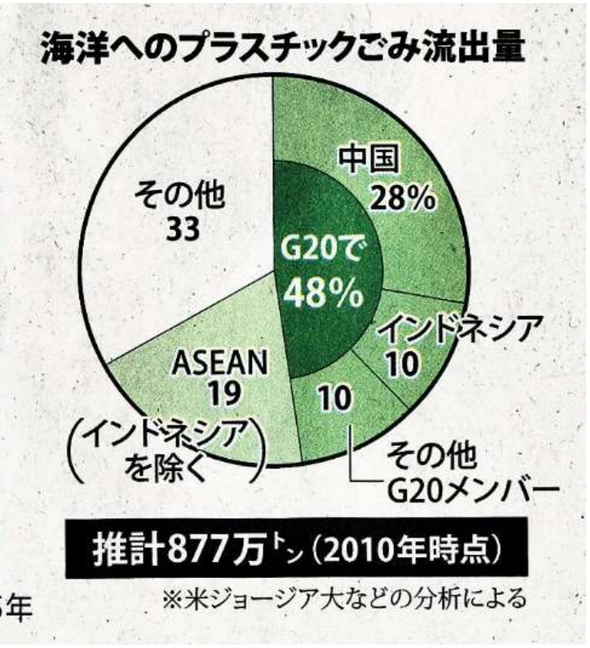
軽井沢町で開かれたG20エネルギー・環境関係閣僚会合は、海洋プラごみ問題が主要テーマだった。G20構成国にはプラスチック生産量の増加が見込まれる新興国のほか、国際的な規制に後ろ向きな国も含まれ、削減の数値目標を議論すれば、利害が対立する可能性が高かった。

そこで議長国の日本は、流出の防止に主眼を置いた取組みを提案した。各国がそれぞれ排出するプラごみの総量やリサイクル状況を定期的に報告する。これらを基礎データとして集積し、海洋プラごみ問題の全体像を目指す。会合では、この取組みを設けることが合意された。

日本も汚染国

梅雨明けの18日朝、港湾サービス事業を展開する「東京港埠頭」の海上清掃船6隻が東京港を出発した。国内有数の国際貿易港・東京港には、大小さまざまな河川が注ぐ。東京港埠頭は東京都の委託で、港に浮かぶごみの回収業務を担っている。河口付近は水温や塩分濃度などが異なる海水と淡水が混じり、海面に「潮目」と呼ばれる筋が表れ、浮遊物が集まりやすい。この日も多くのプラごみが潮目付近を漂い、清掃船が次々と回収していった。

「花見の時期になると、もっと多くのごみが流れ込んでくる」。清掃船の山本典男船長(55)は双眼鏡で海面のごみを探しながら説明してくれた。山本船長は「取りこぼしなどほとんどが外洋に流れ出ている」と話す。日本も「汚染国」の一つなのだ。

日本から海に流出するプラごみは年間2万～6万トンとの推計があるが実態ははっきりしない。そうした中、国内

プラスチックごみが漂うフィリピン・マニラの海で泳ぐ子ども＝環境NGOグリーンピース提供